

# 支援企業紹介

## ● 株式会社 十文字チキンカンパニー

### 肉用若鶏の首都圏シェアNo1 「きまじめ品質」を掲げ、 最高の美味しさと本当の安全を追求

十文字チキンカンパニー（本社岩手県二戸市、資本金1億円）は、国内トップクラスのチキン製造メーカー。その安全で高い品質が支持され、肉用若鶏の首都圏エリアへの供給量は、業界トップにある。経営トップに立つ十文字保雄社長は44歳の若さ。旺盛な好奇心を基にした豊かな発想力とフレッシュな感覚で、同社の経営をリードしている。

#### 国内生産の7%を占め 業界第3位に位置

十文字チキンカンパニーは、肉用若鶏の生産・製品販売、飼育農場の運営、商品開発などを行っている国内トップクラスのチキン製造メーカーである。

種鶏の飼育から加工までの一貫生産体制の中で、肉用若鶏の生産量は年間4200万羽を超え、国内生産量全体（約6億2100万羽＝2007年5月発表の農林水産統計）の約7パーセントを同社で占める。また、国内産の企業別出荷量でみると、第3位の位置にある。

ちなみに農林水産省が公表した農林水産統計（2007年5月）では、国内生産量全体の中で岩手県の肉用若鶏の生産量は鹿児島県の19パーセント、宮崎の18パーセントに次いで第3位の15パーセント。つまり岩手県産の約半分が十文字チキンカンパニーが生産した若鶏ということになる。

同社の十文字保雄社長は、この数字をさらに解説して次のように言う。



十文字保雄社長

同社のホームページの中に「きまじめチキン日記」と題したブログを持ち、気取らない語り口で日常の話題から業界の裏話、食に関する考え、時事評論、スポーツ、趣味にいたるまで多彩に執筆。趣味はパソコン、カメラなどのデジタルもの。カーリングの岩手県代表になったこともある。

#### ● 企業概要

創業	1960年 (十文字健助が採卵養鶏開始)
設立	1975年
代表者	十文字保雄
所在地	(本社) 岩手県二戸市石切所 字火行塚25
電話番号	0195-23-3377
資本金	1億円
売上高	341億円(2007年3月期)
従業員数	1300名
業務内容	鶏肉製品生産、非熱加工、 鶏肉製品販売、飼育農場運 営、種鶏場運営、孵卵場運営、 雛販売、有機質肥料生産・ 販売等。

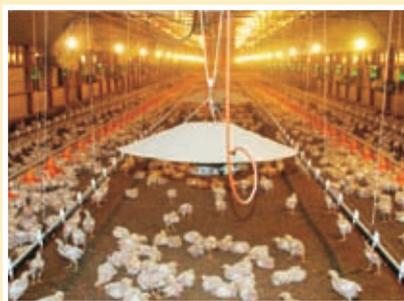
URL <http://www.chicken.jp>

「距離的な条件などから九州産は大阪など関西への出荷が多く、巨大マーケットである首都圏エリア（東京都・千葉県・埼玉県・神奈川県・茨城県・栃木県・群馬県・山梨県）での占有率は岩手県産が高いんですね。当社では、生産量の4分の3を首都圏エリアに供給していて、シェア的にはおよそ15パーセント、供給量ではナンバーワンだと自認しております」

#### 業界のタブーに挑戦し、 抗生物質を与えずに飼育

東京を中心とした首都圏エリアの品質に対する要求はどこよりも高く、世界一厳しいマーケットといわれるのだという。その中で、同社の製品が高い支持を集めている理由は、その安全性と品質、味への高い評価があるからだ。

同社が安全な食品づくりのために特にこだわっているのは、抗生物質や合成抗菌剤を使用しない飼育だ。十文字社長は「抗生物質を与えず若鶏を育てる。それは、業界にとってタブーとされてきたことでした。当社は、そのタブーに



安全で美味しい製品づくりのため種鶏の飼育から加工まで一貫体制を行なう



出荷後の鶏舎は床面のブラシがけなど隅々まで清掃して空にするオールイン・オールアウト方式を採用。給餌器・給水器も洗浄し常に清潔を保つ



抗生物質を排除するため出入りする車輛も消毒。日頃から衛生管理を徹底



醗酵鶏ふんを製造するコンポスト工場。農業・酪農の現場で鶏ふんをリサイクルする事業も行なっている

挑戦した」と話す。

抗生物質とは、カビなどの微生物から産出される抗菌作用を持った物質のこと。家畜として群れで飼育し、規定の体重量まで効率良く育てていくためには、成長促進効果と病気予防などの観点から抗生物質は必須だと業界では長く信じられてきたのだという。しかし、野菜などの農薬問題が起きる中で、消費者が「畜産も薬剤に頼りっきりで不健康な飼育をしているのではないか？」と疑問を抱くようになった。また、抗生物質の効果についても、投与によって死滅していた菌が突然変異で耐性を獲得（耐性菌）していくことが指摘され、必ずしも万能ではないことが知られてくる。抗生物質の使用をやめれば、飼育期間が長くなりコスト高につながるなど、さまざまなリスクがある中で、十文字社長は「消費者のニーズに、より応えた製品づくり」を目指し、抗生物質の不使用を決断したのだ。

同社では現在、「健康な鶏は、健康な卵、健康な雛鳥から」との考え方で、飼育の原点から徹底した衛生管理、きめ細かいトレーサビリティ、ストレスの少ない生育環境づくりを行っている。日光が差し込む自然換気式の開放鶏舎やケージを使用しない平飼方式の導入、自然地下水の使用、植物由来原料の飼料（トウモロコシなど）などで、鶏たちはすくすくと健康に育っている。

## 38歳で社長就任 経営の勉強でセンターを活用

美味しさと安全性を追求した食品づくりを、同社は「きまじめ品質」とキャッチフレーズ化し、全社員のポリシーとして徹底している。その先頭に立つのが十文字社長だが、社長就任は2002年、38歳のときのことである。

「大学の法学部法律学科を卒業してすぐ、父・健助（現会長）の創業した十文字養鶏に入社。その翌年にイギリスに渡り、同業者の研修を行いました。経営の勉強といった勉強は学生時代からやったことがありませんでした」

いずれ会社の経営を担わなければならなかった十文字社長が、経営者の勉強の場との一つとして活用したのが「いわて産業振興センター」（当時の名称は県中小企業振興公社）だったという。

「センターは年間を通じて、さまざまなプログラムを組んでいます。私は、経理の知識を学ぶセミナーから始めて、ポップ制作の勉強会にまで参加しましたね。当時は経営者大学というプログラムがありまして、私も参加しました。異業種の経営者クラスの方のお付き合いもひじょうに深まりますし、これはとても良かったので、その後、工場長クラス、部長クラス、課長クラスも片っ端から派遣させていただきました」

十文字社長は社長就任の年に、イメージ戦略の一つとしてCI（コーポレート・アイデンティティ）を導入し、全国に打って出る近代化企業へとイメージを刷新。その後、創業当時から続く品質第一の姿勢をより高めながら、植物性飼料を使った臭いのない「菜・彩・鶏」などの銘柄鶏の開発、副産物の鶏糞を大地に還元して自然循環型農業に寄与するリサイクル工場の建設など、「きまじめ品質」を柱にして社業を発展させてきた。

今後の目標については「ほくらには、大きく分けて農場と工場の二つのオペレーションがあります。その両方のオペレーションにおいて、他社さんが真似したくなるような、より効率的でより品質を高めることができる仕組みづくりを実現していきたい」と話す。その過程のコンサルティングなどで期待を寄せる一つに、昨年8月に開設した「いわて産業振興センター二戸サテライト」の名も挙げている。

## いわて産業振興センター 二戸サテライト

センターの県北（二戸・久慈）地域の活動拠点として昨年8月、二戸地方振興局に開設。職員の「県北支援チーム」が企業を訪問し、創業・起業家支援、人材育成支援、受発注取引支援、産学官連携や研究開発、知的財産に関する支援、設備貸与や資金貸付など、企業の課題解決のための支援についてこれまで以上に迅速に対応致します。また、地域農林水産資源を生かした食産業や伝統産業企業の支援も積極的に行います。

詳細は「いわて産業振興センター」のHPをご覧ください。